

保健・医療・福祉の このひとつきの動き



アレルギー成分ない食品、 4万点から検索

食物アレルギーの原因となる成分を含まない食品をインターネット上で検索し、その商品を扱う店舗の価格を比べながら購入できるサイト「クミタス」を、東京都内の健康情報会社ウィルモアが26日に始めた。事前に「卵」「乳」などアレルギーを登録しておけば、その成分を含まない商品が瞬時にわかる。

たとえば、乳アレルギーの人が「洋菓子」で検索すると、乳成分を含まないパイやビスケットなどが出てくる。商品をクリックすると、アマゾン、楽天、ヤフー内の各店舗と、セブンネットショッピングのうち、扱っている店舗と価格がわかる。ウィルモアが収集した約4万点の商品の成分データを反映した。

社長の石川麻由氏も乳アレルギーがあり、食品探しに苦労してきた。「クミタス」には「食(を)満たす」という意味がある。「世の中には卵アレルギーでも食べられるラーメンや、乳アレルギーでも食べられるチーズもある。食物アレルギーだからこそ、食の選択肢を増やしたい」。

(9月27日付朝日新聞)

低体温症、屋内こそ注意 屋外の3倍、8割が60歳以上

低体温症は屋内でもご注意ください。冬場、重い低体温症で病院に運ばれる人は、屋外より屋内での発症が3倍も多いことが日本救急医学会の調査でわかった。低体温症の全国的な実態調査は初めて。発症者の8割近くが60歳以上。脳卒中の後遺症や糖尿病などで温度感覚が鈍っている場合は、屋内でも低体温症になりやすいという。

低体温症は、通常約37℃に保たれている体の中心の体温が35℃以下になった状態。体温が下がって血液の循環が鈍り、脳に回らなくなつて意識を失い、死亡することもある。

学会が2010年12月からの3か月間、全国68の医療施設に救急搬送された418人の症状を調べた。

このうち屋内で発症したのは303人で、屋外は100人(15人は場所不明)。平均年齢は屋内73.2歳、屋外は62歳だった。入院、後遺症、死亡した割合のすべてが屋内のほうが屋外よりも多かった。年齢別では60歳以上が77%を占めた。

60歳までの世代では泥酔や事故

など外因による発症が主だが、60歳以上になると脳卒中の後遺症や糖尿病など持病が原因となったケースが多い。脳卒中の後遺症や重度の糖尿病は、末梢神経の働きが弱るため温度感覚が鈍くなりやすい。判断力が低下し、屋内を適温にできず症状が悪化するという。認知症で暖房器具の操作ができず屋内で低体温症になった患者もいた。

調査を担当した日本医科大高度救命救急センターの横田裕行氏は「家族や周囲の人が早めに気を配ることが大切」と話している。

(9月28日付朝日新聞)

被災自治体職員、 5か月で147人体休職 うつ病などの心の病

東日本大震災後、岩手、宮城、福島3県の沿岸と東京電力福島第一原発事故で避難指示区域となった地域の計42市町村で、職員がうつ病など心の問題で休職するケースが相次いでおり、今年度も8月までの5か月で147人が1か月以上の長期休職をしていることが読売新聞の調査でわかった。

復興事業の本格化で自治体業務は拡大し、職員の負担は増しており、震災から2年半が過ぎても厳しい状況は続いている。

調査は、岩手県の12市町村、宮城県の15市町、福島県の15市町村が対象。11年4月から今年8月末まで、年度ごとに心の問題で長期休職した職員数を尋ねた。2011年度の長期休職者は286人、2012年度は254人で震災前の2010年度の177人を大きく上回った。

震災後2年半での県別の休職者数(延べ人数)は、宮城県が461人、福島県が180人、岩手県が46人。市町村別(同)では、仙台市が207人で

最も多く、次いで福島県いわき市が101人、宮城県石巻市が90人だった。いわき市では、今年度の5か月間で20人が休職しており、2010年度の23人に近い人数となっている。

(9月30日付読売新聞)

赤ちゃん19人に 「先天性風疹症候群」 昨秋の流行以降

風疹の大流行がおさまりつつある一方で、妊婦が感染し、赤ちゃんの耳や心臓などに障害が出る「先天性風疹症候群(CRS)」が増え続けている。流行が始まった昨秋以降で19人。厚生労働省は9月30日に委員会を設置した。

CRSは親がワクチンで風疹の感染を予防するしかない。風疹のワクチン接種が国内で始まるきっかけとなったのは約50年前。まだ復帰前の沖縄だった。

1964年、米国で風疹の大流行が起きた。米軍基地を抱える沖縄が、その大きな影響を受けた。翌1965年、基地から感染が拡大。沖縄で408人のCRSの子どもが生まれた。

「国内で風疹が重要な病気と考えられはじめたのは、沖縄でCRSが報告されてからだった」。当時、九州大病院の小児科医だった西南女学院大学の植田浩司氏は振り返る。沖縄の子どもの健康状態を調べるチームの一員としてこの年、沖縄を訪れた。

植田氏らの調査結果を受け、国内でワクチン接種を求める声が高まり、77年に予防接種が始まった。ただし、対象は女子中学生。男子は外された。その男子を中心とする現在の20～40代が多く感染して、今季の流行につながっている。

国立感染症研究所によると、CRSの報告は2005～2011年は年間

0～2人ほど。CRSの赤ちゃんが生まれるまで感染と20～30週の時間差がある。「今後、増える可能性がある」という。

植田氏は「未接種の大人を対象に予防接種の体制を整えてほしい」と訴える。厚生労働省の委員会は、長期的に風疹の流行を抑え、CRSをなくするための指針をつくる。

(9月30日付朝日新聞)

70代の体力、 12年で5歳若返る

70代の体力は、ここ12年で5歳ほど若返った——。文部科学省が13日に発表した「体力・運動能力調査」で高齢者の体力の向上ぶりがわかった。健康への意識が高まり、スポーツクラブなどで定期的に運動する人が増えたためとみられる。

調査は昨年5～10月に、全国の6～79歳の約7万4000人を対象に実施した。65歳以上は、調査を始めた1998年度以降、「握力」「上体起こし」「6分間歩行の距離」などほとんどの項目で、記録が伸びているのが特徴だ。

なかでも70～74歳、75～79歳は、男女とも全6項目の得点合計で過去最高を更新し、70～74歳は2000年の65～69歳、75～79歳も2000年の70～74歳の水準に並んだ。65～69歳の男性の得点合計も過去最高だった。

高齢者層は、フィットネスジムや草野球、ママさんバレーチームなどを含む「スポーツクラブ」への所属率が高く、女性では65歳以上、男性も75歳以上で40%を上回った。最も所属率が低い30代女性の2倍だ。スポーツクラブに所属している人の1週間の運動頻度をみると、「ほとんど毎日する」という人の割合が25～59歳は20%前後だったの

に対し、65歳以上では30%を超えていた。

一方、20～64歳の年代のうち、35～39歳は男女とも得点合計が右肩下がりだ。仕事や子育てで忙しく、運動する時間が取りにくい影響と指摘されている。座った姿勢から上体を前に曲げ、柔軟性を測る「長座体前屈」は、この年代層の大半で低下傾向を示した。

高齢者の体力向上について、現在60代半ばから後半の「団塊の世代」を中心にリタイア後も活動的な人が増えた、と文科省はみる。調査にあたった順天堂大スポーツ健康科学部の内藤久士教授は「身近なスポーツクラブへの参加が向上を後押しし、生きがいや仲間作りにも役立っているのではないかと話している。

(10月13日付朝日新聞)

今夏の熱中症搬送、 最多の5万8000人 お年寄りが半数

総務省消防庁は15日、6～9月に熱中症で救急搬送された人が集計を始めた2010年以降、最多の計5万8729人だったと発表した。これまでの最多は同2010年の5万6119人。死者は88人で、最多だった同年の171人から半減した。

搬送者のうち、65歳以上のお年寄りが全体の47%を占めた。人口10万人あたりの都道府県別の搬送者数は高知が75人と最多で、和歌山の71人、熊本の68人が続いた。同庁救急企画室は「気温の高さが搬送者数に反映したが、熱中症という言葉と対処法が広く認知されるようになり、死者数は抑えられた」と分析した。

(10月15日付朝日新聞)